

【一】次の文章 A・B を読み、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

【文章 A】

人間には、いくつもの顔がある。——私たちは、このことをまず肯定しよう。相手次第で、自然と様々な自分になる。それは少しも後ろめたいことではない。どこに行ってもオレはオレでは、面倒臭がられるだけで、コミュニケーションは成立しない。

だからこそ、人間は決して ユイツムニ の「分割不可能な」個人、individual ではない。複数の「分割可能な」分人、dividual である。人間が常に首尾一貫した、分けられない存在だとすると、現に色々な顔があるというその事実と ムジュン する。それを解消させるには、自我（＝「本当の自分」）は一つだけで、あとは、表面的に使分けられたキャラや仮面等に過ぎないと、価値の序列をつける以外にない。

しかし、この考え方は間違っている。

もしそう考えるなら、私たちは、誰とも「本当の自分」でコミュニケーションを図ることが出来なくなるからだ。すべての人間関係が、キャラ同士、仮面同士の化かし合いになる。それは、他者と自分とを両方とも不当に おとし 貶める サツカク であり、実感からも遠い。

(A) 分人は、こちらが一方的に、こうだと決めて演じるものではなく、あくまでも相手との相互作用の中で生じる。キャラや仮面という比喻は、表面的というだけでなく、一旦主体的に決めてしまうと硬直的で、双方向性でない印象を与える。

(B)、実際に私が実家の祖母や友人との間にそれぞれ持っている分人は、長い時間をかけたコミュニケーションの中で、喜怒哀楽様々な反応を交換した結果である。また関係性の中でも変化し得る。何年も経てば、出会った頃とは、お互いに口調も表情も変わっているだろう。それを一々、仮面を付け替えたとか、仮面が ヘンヨウ したとか説明するのは無理がある。

(C)、他者と接している様々な分人には実体があるが、「本当の自分」には、実体がないからだ。それは結局、幻想にすぎない。

私たちは、たとえどんな相手であろうと、その人との対人関係の中だけで、自分のすべての可能性をハッキリすることは出来ない。だからこそ、どこかに「本当の自分」があるはずだと考えようとする。しかし、私もまた、その作品世界との相互作用の中で生じたもう一つ別の分人に過ぎない。決してそれこそが、ユイイツ価値を持っている自分ではなく、学校での顔は、その自分によって演じられ、使い分けられているのではないのだ。分人はすべて、「本当の自分」である。

私たちは、しかし、そう考えることが出来ず、「本当の自分」という幻想に捕らわれてきたせいで、非常に多くの苦しみとプレッシャーを受けてきた。どこにも実体がないにも拘らず、それを知り、それを探さなければならぬと四六時中そそのかされている。

それが、「私」とは何か、という、アイデンティティの問いである。

占い特集や自己啓発書などでしょうちゅう目にする「本当の自分」という言葉。これとセットになっているのが、「個性」である。そして、個性とは、一人一人の「個人」に特徴的な性質のことである。

私たちは、自分の中に、何か人とは違う個性的なところを見つけないと願ひ、人に左右されず、その個性を大切にしたいと思つてゐる。そうなのにもかかわらず、その個性がわからないというのは、いつでも煩悶の種だ。

一体、個性とは何なのか？

文部科学省(当時の文部省)の中央教育審議会で、「個性の尊重」が明確に目標として掲げられるようになったのは、一九八〇年代前半のことである。七五年生まれの私が小、中学生になったころには、教育現場でも、やかましいくらいに「個性を伸ばせ」、「个性的に生きなさい」と言われていた。

私が属する団塊ジュニア世代は、そもそも人数が多く、受験戦争も激化の一途を辿っていたので、詰め込み式の画一化教育からの脱却という問題意識自体は、真つ当だったと思う。しかし、年がら年中、念仏のように聞かされていた「個性」という言葉は、まったくもってうつつうしかった。

そもそも、個性的に生きると言われても、その年頃の子供は、何をどうして良いのかわからない。みんな同じ制服を着て、朝から

夕方まで、同じカリキュラムに従って勉強している。部活動でもすれば、個性的ということなのか？ 仕方がないから、髪型に凝ってみたり、制服を改造してみたりすると、それは個性を履き違えている！と、職員室に呼び出されたりする。

個性というのは、実のところ、誰にでもある。まったく同じ人間は、この世の中に二人ない。ものの見方から感じ方、考え方まで、十人十色である。そして、際立って個性的である人は、社会との軋轢*いりあつれきも大きくなる分、苦しむことも多い。自分は周りから浮いてると感じる人は、むしろ平凡さにこそ、憧れるものだ。

結局、教育現場で「個性の尊重」が叫ばれるのは、将来的に、個性と職業とを結びつけなさいという意味である。自分のやりたいことを見つけないさい、努力して夢を実現しなさい。社会に出て、自分のしたい仕事をするところこそが個性的に生きる、という意味だ。自分の個性をハッキリするのは、まさにその時である。

とはいえ、自分のしたいことが、そんなに簡単にわかるわけがない。若いのに、夢も目標もないのかと言われるが、職業の多様性は、元々は、社会の必要に応じて生じたもので、色々な個性の人間がいるから、それを生かせるように多様な職業が作られた、というわけではない。

職業の多様性は、個性の多様性と比べて遥かに限定的であり、量的にも限界がある。

繰り返すが、個性は誰にでもある。問題は、職業とのマッチングである。それがわかりやすい人はいい。しかし、漠然とした自分の個性が、一体、何の職業と適合的なのか、なかなか見えにくい人もいる。何かをしたいという気持ちは、身悶みもだえするほど強い。しかし、それが何かがわからない。私自身にも、そういう時期があった。私たちには、「職業選択の自由」がある。しかし、それは同時に、「職業選択の義務」でもある。なぜなら、私たちの社会は、必要に応じて様々な機能分化し、誰かがその役割を担わなければ、不都合だからだ。農業や漁業の後継者問題がよく取り沙汰されるが、農業や漁業に向いている人は、農業や漁業をしてもらわなければ困るのだ。

そして、この義務を果たさない人間の「個性」を、社会はなかなか承認してくれない。社会的な分業の一環として、それは、役に

立っていない個性だからだ。

【語注】

* 1 individual]……個々の、別個の。

* 2 diuidual]……分離した。

* 3 首尾一貫……最初から最後まで、主張や方針などが変わらずに同じであること。主張や物事に対する姿勢が一貫して変わらないこと。

* 4 硬直的……ゆとりがなく、変化に柔軟な対応のできない状態。

* 5 幻想……根拠のない空想。とりとめのない想像。

* 6 アイデンティティ……自分が自分であること、さらにはそうした自分が、他者や社会から認められているという感覚のこと。

* 7 自己啓発書……人間の能力向上や成功のための手段を説く、自己啓発を目的とした書籍。

* 8 煩悶……心をいたためもだえること。悩み苦しむこと。

* 9 団塊ジュニア世代……日本で1971年（昭和46年）から1974年（昭和49年）に生まれた世代を指す。

* 10 軋轢……人の仲が悪く、あい争うこと。

【平野啓一郎『私とは何か「個人」から「分人」へ』講談社現代新書】

【文章B】

私たち言語の教育に関わる者は、子どもの表現力をつけるという名目のもと、スピーチやディベートだといろいろな試みを行ってきた。その一つ一つには、それぞれ意味や価値があったのだろう。

しかし、そういった「伝える技術」をどれだけ教え込もうとしたところで、「伝えたい」という気持ちが子どもの側にないのなら、その技術は定着していかない。では、その「伝えたい」という気持ちはどこから来るのだろうか。私は、それは、「伝わらない経験からしか来ないのではないか」と思う。いまの子どもたちには、この「伝わらない」という経験が、決定的に不足しているのだ。

現行のコミュニケーション教育の問題点も、おそらくここに集約される。この問題意識を前提とせずに、しゃかりきになって「表現だ!」「コミュニケーションだ!」と叫んだところで意味はない。

では、どうすればいいのだろうか?ここに、演劇、あるいは演劇的な授業の大きな役割がある。演劇は、常に他者を演じることができる。実際の体験教育ほどの効果はないかもしれないが、異文化、他者への接触をフィクションの力を借りて疑似体験することができる。欧米において、異文化コミュニケーション教育の中核の一つに演劇が位置してきたのも、多くはこの点に依拠*9いっきよすると私は考えている。

そしてもう一点、演劇は、自分を出発点とすることができる。無理に自己を変えるのではなく、自分と、演じるべき役割の共有できる部分を見つけていくことによって、世間と折りあいをつける術を、子どもたちは学んでいく。

仕事柄、現代の若者たちのコミュニケーション問題について、たくさんインタビューを受ける。マスコミは当然、「いまどきの若者のコミュニケーション能力は危機に瀕している」とか、「子どもたちのコミュニケーション能力が急速に低下している」といったセンセーショナルな文言を並べたがる。しかし、実際には、多くの言語学者、社会学者に聞いても、彼らが良心的な研究者であればあるほどそういった学問的な統計は出してこない。もちろん「近頃の若者は、コミュニケーション能力が低下していると思いますか?」といった類の、印象だけを聞くアンケート調査なら、「低下」「著しく低下」といった回答が多く出てくるだろうが、しかしそ

れを根拠づける学問的統計は、^{*11}寡聞にして聞いたとががない。

では、いったい、何が問題になっているのだろうか。

私は、現今の「コミュニケーション問題」は、先に掲げた「意欲の低下」という問題以外に、大きく二つのポイントから見ていくべきだと考えている。

一つは「コミュニケーション問題の顕在化^{けんざいか}」という視点。もう一つは、「コミュニケーション能力の多様化」という視点。

若者全体のコミュニケーション能力は、どちらかと言えば向上している。「近頃の若者は……」としたり顔で言うオヤジ評論家たちには、「でも、あなたたちより、いまの子たちの方がダンスはうまいですよ」と言っただけで、いつも私は思う。人間の気持ちを表現するのに、言葉ではなく、たとえばダンスをもって最高の表現とする文化体系であれば日本の中高年の男性は、もつともコミュニケーション能力の低い劣った部族ということになるだろう。

リズム感や音感、いまの子どもたちの方が明らかに発達しているし、ファッションのセンスもいい。異文化コミュニケーションの経験値も高い。けっしていまの若者たちは、表現力もコミュニケーション能力も低下していない。

事態は、実は、逆なのではないか。全体のコミュニケーション能力が上がっているからこそ、見えてくる問題があるのだと私は考えている。それを私は、「コミュニケーション問題の顕在化」と呼んできた。さほど難しい話ではない。

どんなに若者のコミュニケーション能力が向上したとしても、職人の卵たちの就職が極めて厳しい状態になってきている。現在は、多くの工業高校で（工業高校だからこそ）、就職の事前指導に力を入れ面接の練習などを入念に行っている。

しかし、つい十数年前までは、「無口な職人」とは、プラスのイメージではなかったか。それがいつの間にか、無口では就職できない世知辛い世の中になってしまった。

そう考えていけば、「理科の苦手な子」「音楽の苦手な子」と同じレベルで、「コミュニケーションの苦手な子」という捉え方もできるはずだ。そして「苦手科目の克服」ということなら、どんな子どもでも、あるいはどんな教師でも、普通に取り組んでいる課題

であつて、それほど深刻に考える必要はない。これはのちのち詳しく触れるが、日本では、コミュニケーション能力を先天的で決定的な個人の資質、あるいは本人の努力など人格に関わる深刻なものと捉える傾向があり、それが問題を無用に複雑化していると私は感じている。

理科の授業が多少苦手だからといって、その子の人格に問題があるとは誰も思わない。

音楽が多少苦手な子でも、きちんとした指導を受ければカスターネットは叩けるようになるし、縦笛も吹けるようになるだろう。誰もがモーツァルトのピアノソナタを弾ける必要はなく、できれば中学卒業までに縦笛くらいは吹けるようになっておこうよ、現代社会では、それくらいの音感やリズム感が必要だからというのが、社会的な^{*13}コンセンサスであり、義務教育の役割だ。

だとすれば、コミュニケーション教育もまた、その程度のものだと考えられないか。コミュニケーション教育は、ペラペラと口のうまい子どもを作る教育ではない。ロベたな子でも、現代社会で生きていくための最低限の能力を身につけさせるための教育だ。

ロベたな子どもが、人格に問題があるわけでもない。だから、そういう子どもは、あと少しだけ、はつきりとものが言えるようにしてあげればいい。

コミュニケーション教育に、過度な期待をしてはならない。その程度のものであることが重要だ。

【語注】

*9 依拠……よりどころ。よりどころとすること。 *10 センセーションナル……人の感情・感覚を強くゆすぶる性格をもつさま。

*11 寡聞……見聞が狭いこと。 *12 先天的……生まれながらにして持っていること。

*13 コンセンサス……「意見の一致」あるいは「合意」。

【平田オリザ『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書】

【※問題作成の都合上、一部改変】

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に直せ。

- a ユイツムニの個人ではない。 b 事実とムジユンする。 c 貶めるサツカクであり、 d 仮面がヘンヨウした。
e 可能性をハツキする。

問二 空欄 (A)・(B)・(C) に当てはまる語としてそれぞれ最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア そこで イ また ウ ところで エ そして オ しかし

問三 文章A傍線部①「文部科学省(当時の文部省)の中央教育審議会で、「個性の尊重」が明確に目標として掲げられるようになった」とあるが文科省が教育現場で「個性の尊重」を掲げる意図は何か。「意図がある。」という語尾に繋がるように本文中から二十五字程度で抜き出し、最初の五字を答えよ。(句読点を含む)

問四 文章A傍線部②の「職業選択の義務」と「個性」にはどのような関係性があるか。最も適当なものを次のア～エから選び記号で答えよ。

- ア 職業を選択する際は自由がありつつ適材適所でそれぞれの仕事を担う必要があるということ。
イ 多様化する個性の中で、その個性に適した職業に従事するということ。
ウ 社会は分業化しており、それぞれの個性に応じた役割を担うことが必要であるということ。
エ 職業の多様性は個性の多様性と比較して限定的であるため、選択できる職業も限定的であるということ。

問五 文章Aでは個性とその在り方について述べている。本文の内容と合致するよう、次の空欄に適切な語句を本文中から抜き出して答えよ。

人間にはいくつもの顔がある。だから、私たちは(1)とは必ずしも言えず(2)であるということが出来る。(2)は相手との相互作用の中で生じると決めつけることもできる。(2)は実体があるとはしばしば指摘されるが、(3)には実体がないことが定説である。

問六 文章Aでは「個性」Bでは「コミュニケーション能力」について述べている。双方の共通点を本文中から漢字二字で抜き出して答えよ。

問七 文章AとBについてまとめたものが左記の文章である。続く結論部分として最も適当なものを次のア～エから選び記号で答えよ。

文章Aは「個性とはなにか」、文章Bは「教育におけるコミュニケーションとはなにか」について述べている。個性やコミュニケーション能力は、いずれも昨今の教育活動で多く取り上げられている問題である。一方で、「個性」・「コミュニケーション能力」ともに挙げられている課題点が本質的なかはいささか不明瞭である。

ア 生きていくうえで必要不可欠とされている「個性」と「コミュニケーション能力」について、文章A・Bでは「個性」と「コミュニケーション」を対比のように解釈でき、それぞれ答えのないモノとして生きていく中で個人個人が答えを探すことが必要だと述べている。

イ 生きていくうえで必要不可欠とされている「個性」と「コミュニケーション能力」について、文章Aでは「個性」について、

文章Bでは「コミュニケーション」について具体例を列挙している。文章Aでは個性とは自分らしく生きることを示唆しており、文章Bではコミュニケーションを中心とした世の中が形成されていると述べている。

ウ 生きていくうえで必要不可欠とされている「個性」と「コミュニケーション能力」について、文章A・Bでは社会生活に生きるものと関連付けて考えることができ、文章Aで述べられている個性とはいかなる局面でも本当の自分ということを意味し、文章Bでのコミュニケーションは生きていく上で、最低限の能力を取得するためのものであると述べている。

エ 生きていくうえで必要不可欠とされている「個性」と「コミュニケーション能力」について、文章AとBを対照的に読んだ場合、文章Bは文章Aの付随的な役割を担っており、文章Aにおいて説明しきれない個性という部分を文章Bのコミュニケーションという主題を通じてより具体的に示す役割を担っている。

【二】次の文章を読み、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に丁寧に記入せよ。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

父親の代から続く質屋を守らねばならない政次郎まさじろうとその長男賢治けんじ（官沢賢治）。長男とは、家業を継ぎ、その姿は厳格であるべきと叩き込まれた政次郎と賢治の間には、選ぶ道をめぐって長い確執があった。一方、賢治は地元新聞に小説が掲載され、本も出版され、作家として身を立てられるようになると思っていた矢先、結核けつかくに倒れる。政次郎は、娘のトシも十年前に同じ病で亡くしており、今度は、病状の重くなった我が子を献身的に看病すると決意していた。

ばかり

ばかり

ストーブのなかで薪がはぜる。それ以外の音はなかった。しばらくして、こんどは政次郎が、

「すまなかつたじゃ」

「何したのす」

「お前は中学校を出るとき、さらに上の学校へ行きたいと、私わたしはにべもなく『だめだ、質屋しちやに学問が必要まねえ』と。あのとき進学をゆるしていれば、お前まへはもつと……」

「とんでもねえ」

i 賢治は天井を凝視ぎょうししつつ、老人のような声で、

「一年おくれた子ども、結局、高等農林に行かせてくれたでねえすが。あそこでおらは、物理や化学や地学のことは知ったんじや。だからこそ」

と、そこで咳の大波が来た。賢治はびよこんと身を起こし、ごーっと息を吸ったあと、のどから砲声を連発した。政次郎はあわてて、

「賢治」

真新しいさらし*4を口にあててやったけれど、一瞬おそく、白いふとんには雁のわたりを思わせるVの字なりの赤い点々が飛び散った。

砲声は、やまなかった。肺の空気を全部しぼり出してもなお息を吸うひまがなかった。賢治がさらしを奪い取り、口におしつけて離さない。政次郎にはもう、「しっかり。賢治、しっかり」

励ますほかの仕事はなかった。励ましたところで賢治はみじんも楽になることはなく、(A) 病状は好転しない。ことばとは、これほどまでに

(無力か)

永遠のごとき時間ののち、ようやく咳がやむ。今回はまだしも短いようだった。賢治はぐったりと背をまるめ、紙を敷くようにしてあおむきになった。

頭が、(B) 枕に着地した。眼窩*5に涙をため、目玉が飛び出しそうなほど政次郎を見つめて、

「……んだはんて、おらの詩や童話は、ほかの誰にもにないものになったじゃ」

「ばか、賢治、もういいなだじゃ。はやく寝なさい」

さらにで口のまわりの血をぬぐってやりつつ政次郎は言ったが、賢治はきかなかった。

「そのためにおらは、勘ちがいしました」

「もういい」

「たかだか二冊出ただけで才能があると思ひ込んで、教師の仕事をやめ、その後も詩作に集中せず、……お父さんには、迷惑を……」

…「まだ出せるぞ。何冊も」

「だめです。傲慢ごうまんの罪のむくいです」

「人間はみな傲慢なものだ」

「机に向かえませぬ」

その口調は、さっぱりしている。

ほとんど自慢そうだった。政次郎は頭にきた。さらしを丸めて右手ににぎると、頬をたたいて、

「あまつたれるな」

「え？」

iii 賢治は、まばたきした。政次郎は二度、三度とたたきながら、げんぶ 嚴父の顔で、

「くよくよ過去が悔やまれます。机がないと書けません。宮沢賢治はその程度の文士なのか？その程度であきらめるのか？ばかめ。

ばかめ」

内心では、

(何もそこまで)

自分でもいやになるのだが、どうしようもなかった。口も手もやまない。父親の業ごうというものは、この期におよんでも、どんな悪人になろうとも、なお息子を成長させたいのだ。

「お前がほんとうの詩人なら、後悔のなかに、せろしやくあ 宿痾のなかに、あらたな詩のたねを見いだすものだべじや。何度でも何度でもペンを取るものだべじや。人間は、寝ながらも前が向ける」

iv 賢治は、目を見ひらいた。

わずかなまふた 險のうごきだったが、^① たしかに瞳は、かがやきを増した。

かがやきのまま、部屋のすみを見た。ストーブのあるのは反対の、左足の先。そこは例の、ズックのトランクが置かれている。書きためた詩や童話の草稿とともに、未使用の用紙もたくさん入っているだろう。まるで自分に言い聞かせるがごとく、

「んだが。んだすね」声に、底が入っている。

その目の光に、政次郎は、ふと子供のころを思い出した。小学校から帰り、カバンを玄関に放り投げてトシと一緒に北上川の川辺あたりへ遊びに行く、そのときの、

「行ってまいります」

という元気の濫費＊おらんびそのものの声。なまいきさと愛らしさが表裏一体だったころ。政次郎はようやく気がゆるんで、
「わるかった」

さらしを置き、手の甲ですつと頬をなでてやった。

*1 結核……結核菌に感染することによって発症する病気。咳や痰などが主要症状。末期には咳とともに出血（喀血）し、戦前の日本では死亡率がとて高かった。

*2 中学校……旧制中学校のこと。高等教育機関への進学を主目的とした男子のみの特権的な中等教育機関。

*3 にべもなく……思いやりのないこと。

*4 さらし……漂白された糸でできた織物。

*5 眼窩……眼球の収まる頭蓋骨のくぼみを指す。

*6 宿痾……長く治らない病气。持病。

*7 ズック……太い麻糸または綿糸で平織にした厚地の織物でできたもの。

*8 濫費……むやみに費やすこと。無駄づかい。

問一 空欄（A）に当てはまる語として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア しかし イ すると ウ むしろ エ 所どころか オ まして

問二 空欄（B）には、その時の様子を表現する擬態語が入る。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア かざりと イ そろりと ウ ふんわりと エ どざっと オ じっと

問三 傍線部①「たしかに瞳はかがやきを増した。」について、表現の説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 擬人法を用いており、賢治の瞳の変化を表現することで、生きる気力がわいてきたことを表現している。

イ 比喻を用いており、賢治の瞳の変化を表現することで、詩作への情熱が戻ったことを表現している。

ウ 「かがやき」をひらがな表記にすることで、賢治の気持ちの変化がほんのわずかなものであったことを暗に示している。

エ 「たしかに」とあるほど、その変化はわずかなものであったことが示唆され、些細な変化に気がつく父親の愛情深さを暗に表現している。

オ 父親に叱られたことで、賢治に子どもの頃の気持ちがよくみがえるきっかけとなったことを示している。

問四 本文中の賢治の「目」の描写 i～iv に注目し、そこで表現されている心情をまとめた。その際、説明が誤っているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 描写 i 「賢治は天井を凝視しつつ」は、病床にいる賢治が天井しか見られない状況で父への思いを噛みしめている心情を表現している。

イ 描写 ii 「目玉が飛び出しそうなほど」政次郎を見つめていることで、病気でやせ細った賢治が父へ感謝を伝えたい心情を表現している。

ウ 描写 iii 「賢治はまばたきした」は、父親の言葉が思いもよらないものだった驚きを表現している。

エ 描写 iv 「賢治は、目を見ひらいた」は、父親に激しい言葉で叱責され、叩かれたことへの動揺を表現している。

問五 傍線部②「政次郎はようやく気がゆるんで」とあるが、政次郎がそれまで気を張っていたのは何によるものか。本文中から五字以内で抜き出して答えよ。

問六 本文の表現上の特徴についてまとめたものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 故郷の方言を使うことで、親子の会話が本音であることを示す効果があり、死の間際にある親子の苦しみがより伝わる表現となっている。

イ 括弧内に、厳格な父親が口に出せない胸の内を描くことで、いかなる時も本音を表に出せない苦悩を表現している。

ウ 「……」の文字記号で沈黙を表現し、父も息子も互いに気を遣い、言いたいことが言えないもどかしさを表現している。

エ 比喩を多用して、視覚的・聴覚的な想像をさせることにより、賢治の病床の苦しみがよりリアルに伝わる表現となっている。

オ 擬音語や擬態語で表現することで、宮沢賢治作品を想起させ、賢治の父親の心中を描いた作品に深みをもたせている。

【三】 次の【本文】「十訓抄」を読み、後の各問いに答えよ。本文の左に示してあるものは対応する現代語訳である。尚、指定された表記方法以外の解答した場合は採点されないため注意せよ。

【本文】「十訓抄」

ある人のいはく、「人は良き友に会はむことをこひねがふべきなり」^①「麻の中の蓬は矯めざるに、おのづから直し」といふたと

自然とまっすぐ成長する

ひあり。蓬は枝さし、直からぬ草なれども、麻に生ひまじりたれば、ゆがみて行くべき道のなきままに、心ならず、うるはしく生
諭えがある。 (伸び方が)まっすぐではない 曲がつて伸びる余地がない

ひのぼるなり。心の悪しき人なれども、うるはしくうちある人の中に交はりぬれば、さすがかれこれをはばかりに、おのづか

あれこれと気を遣うことが多くなり、

ら直しくなるなり。これによりて、良き友に会はむこと、経にも説かれ、文にも勧めたり。顔氏が家訓には、「善人と居るは芝

経典でも説き、

蘭の室に入るが如し、久しくして自づから芳しきなり。悪人と居るは鮑魚の肆に入るが如し、久しくして自づから臭きなり」とい
芳しい芝蘭の部屋に入ると同じだ 長くいれば

へり。また、ある文には、「人の心は、水の入れ物にしたがふがごとし。入れ物細ければ、すなはち細し。円ければ、すなはち

円くなる。心は朋友にならふ、いかが選はざるべけん」と書けり。また九条殿遺誠には、「高声悪狂の人に伴ふことなかれ」と教へ

給へり。

かかれば、はかなくうち語らはむ友なりとも、よくその人を選えらぶべし。「薰くわん猶じゆう、器きを異ことにすべし」となり。花の下もとに春はるばかりを契せきり、月の前に一夜をかぎる友までも、情けある類たぐひひ、忘れがたく思おもひ出いでらるるものなり。

【日本の古典を読む 宇治拾遺物語・十訓抄】 小林保治・増十和子・浅見和彦 校訂・訳 小学館

【※問題の都合上、一部改変】

*1 矯こめめ（ざる）……「矯こめる」は曲まがっているものを伸のばしたり、まっすぐなものを曲まげたりして、形かたちを整とえる。また、曲まげて、ある形かたちをつくるということ。本文では打消して、そのようなことを「しない」という意。

*2 顔かほ氏し家け訓くん……中国の顔かほ之し推すいの記きした訓くん戒けい書しよ。

*3 芝しば蘭らんの室むろ……良よい香かほりのする部ぶ屋や。

*4 鮑ほう魚ぎよの肆し……生なま臭くさい干かし魚ぎよの部ぶ屋や。

*5 九く条じょう殿てん遺い誠じやう……平へい安あん中ちゆう期き、藤とう原げん師し輔ほが記きした教きやう訓くん書しよ。

*6 薰くわん猶じゆう……良よい香かほりの草くさと、臭くさいにおいの草くさ。

問一 傍線部ア～ウの歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して答えよ。

問二 傍線部①「麻の中の蓬」について、「麻」と「蓬」はそれぞれ何を例えているか。本文中から漢字二字で抜き出して答えよ。

問三 傍線部②「心ならず」の本文中の解釈として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えよ。

- ア 無意識のうちに イ 反抗的に ウ 不本意ながら エ 心が正されて

問四 傍線部③「心は朋友にならふ」について、次の問いに答えよ。

(1) 「朋友」とはどのような存在を指すか、本文中から三字で抜き出して答えよ。

(2) 筆者がこのようにいうのはなぜか。その理由をまとめた一文の空欄に当てはまる言葉を、本文から十字で抜き出して答えよ。

- 朋友と一緒に過ごすことにより、人は(A)から。

問五 傍線部④「いかを選ばざるべけん」の現代語訳として正しいものを最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えよ。

ア どうして友を選ばないでいられようか。

イ どうして友を選ぶのだろうか。

ウ どのようにして友を選ぶのだろうか。

エ どうしても友を選ぶことはできない。

問六 次の場面は、【本文】を授業で学んだ後、クラスでの話し合いをした様子である。その際、《資料―「孔子家語」》を参考資料として読み、学びを深めることとした。後の(1)〜(4)の問いに答えよ。

《資料―「孔子家語」》

〈書き下し文〉

孔子曰く、「吾死して後、則ち商や日に益し、賜や日に損せん」と。曾子曰く、「何の謂ひぞや」と。子曰く、商や好みて己に賢る者と居り、賜や好みて己に若かざる者と居る。其の子を知らざれば其の父を視、其の君を知らざればその使ふ所を視、其の地を知らざれば其の草木を視る。故に曰く、善人と居るは、芝蘭の室に入るが如し。久しくして其の香を聞かず。即ち之と化せり。不善の人と居るは、鮑魚の肆に入るが如し。久しくして其の臭を聞かず。亦之と化せり。丹の藏する所の者は赤く、漆の藏する所の者は黒し。是を以て君子は必ず其の與に居る所の者を慎む、と。

《現代語訳》

孔子が言った、⑤「私の死後、商は日一日を豊かになって行くだろうが、賜は日一日として乏しくなっていくだろう。」曾子は尋ねた、「どういう意味でしょうか。」孔子はこう言った、「商は自分より優れた人物と一緒にいることを喜ぶが、賜は自分より劣った人と一緒にいることを喜んでいいる。例えば、その子供がどういう人間であるかを知らないのなら、その父親を注意深く見れば分かる、その人物がどういう人柄であるかを知らないのなら、その友人を注意深く見ていればわかる、その君主がどういう人柄であるかを知らないのなら、その家臣を注意深く見ていれば分かる、その土地の室を知らなければ、そこに生えている草木を注意深く見ると分か

るのである。だから、善人と一緒にいるということは、香草が置いてある部屋へ入っていくことと同じである。長い間そこに居ると、そのよい香りを感じなくなってしまう。これは自分とその香草の香りが同化してしまったのだ。よからぬ人と一緒にいるということは、魚の干物を売る店に入っていくことと同じなのである。長い間そこに居ると、悪臭を感じなくなってしまう。これも同化してしまっただけである。丹をしまっただけある容器は赤くなり、漆をしまっただけある容器は黒くなる。こういうわけで、君子と一緒にいる相手を必ず慎重に選ぶのである。

【新釈漢文大系 『孔子家語』宇野精一著 明治書院】

*1 商……孔子の門人。姓名は卜商（ほくしよう）。文学に通じて、孔門十哲の一人にかぞえられる。

*2 賜……孔子の弟子。姓は端木（たんぼく）、名は賜（し）。子貢は字。四科十哲にあげられる。

*3 曾子……中国、春秋時代の魯の儒学者。名は参（しん）。字は子輿（しよ）。魯の南武城（山東省）の人。孔子の弟子となり、孝道で認められた。

*4 芝蘭……靈芝と蘭。いずれも香りの高い植物。

*5 丹……丹砂を原料とする赤い染料。

《授業の場面》

先生 これまで「十訓抄」を学びました。筆者は本文を書く上で、複数の文章を引用していたことがわかりましたね。中でも漢文の「孔子家語」を典拠として書かれたとされています。《資料―「孔子家語」の書き下し文と現代語訳を参考に、さらに学びを深めていきましょう。》

生徒A 孔子は、その言行を弟子がまとめた書『i』が有名ですよ。以前の授業でも勉強しました。この「孔子家語」でも「子曰く」で孔子の言葉が示され、それに弟子が質問を返し、孔子が答えるという構成になっています。

先生 孔子の考えを理解するために、傍線部⑤のように孔子が言った理由を考えてみましょう。

生徒B 商は自分より優れた人と一緒にいることを喜ぶので、周りの教えを素直に聞くことで幸せになっていくだろうと孔子は考えたのだと思います。

生徒C 自分より優れた人といえるのは劣等感を持つし、厳しい環境ともいえるのではないかな。商はあえて自分からその厳しい環境を選ぶから幸せになると孔子は安心して考えると考えます。

生徒D 賜が自分より劣った人と一緒にいるのを喜ぶのは、自分がリーダーになりたいからではないでしょうか。劣った人の中でリーダーになっても、幸せにはなれない。ということだと思えます。

生徒E 自分より劣った人の中になると、独善的になってしまう恐れがあるよね。それなのに、好んで劣った人の多い環境を選んでしまう賜を、孔子は心配したのだと思います。

先生 「十訓抄」と「孔子家語」を比較して、気づいたことはありますか。

生徒F 「十訓抄」の芝蘭の室や鮑魚の肆の例話は、「孔子家語」と同じです。そこで、「孔子家語」を典拠としたということがわかりました。そして、孔子は「善人と居るは芝蘭の室に居るが如し」と例えたのは（ii）であると定義しています。「十訓抄」の筆者は違った表現をしています。

生徒G 二つの話に合致する故事成語が思い浮かびました。「水魚の交わり」です。^{*1}「三国志」の中で、^{*2}劉備がその時に田舎の書生に過ぎなかった諸葛亮（孔明）^{*3}を補佐役に迎えたところ、劉備がその才能にほれ込み、二人の関係が親密になっていきます。しかし、それを昔からの家臣が不満に思っているのです。劉備は、自分にとって諸葛亮の存在は「魚の水あるがごとし」と述べて理解を求めた逸話があります。

生徒H ことわざで言い表すなら「朱に交われば赤くなる」が適当ではないでしょうか。^{*4}「仮名草紙」の中に『世の中も朱交じはれば赤くなり。寺のほとりの童はならはぬ経をよむと申せり』とあります。

生徒 I 私は「出藍の誉れ」が適当だと思います。「荀子」の中に「君子が言った。『学問は途中でやめてはいけない。青という色は藍という草からとるが、その色は元になっている藍よりもいつそう鮮やかな青色になる。氷は水が元になってできているが、いったん氷になると、水よりもっと冷たい』という逸話からできた故事成語です。

* 1 三国志……中国、三国時代の歴史を記した歴史書

* 2 劉備……中国、三国蜀(しよく)の王(在位221～223)

* 3 諸葛亮……中国、三国時代の政治家、戦略家。字は孔明。

* 4 仮名草紙……江戸幕府開府の慶長8(1603)年頃から、天和2(1682)年までの仮名書きの小説の総称。

* 5 荀子……中国、戦国時代の思想書。

(1) 生徒 A の発言の空欄 i に当てはまる書物の名前を漢字で答えよ。

(2) 傍線部 ⑤ のように孔子が述べた理由を正しくとらえている生徒は B ～ E のうち誰か。アルファベットで答えよ。

(3) 生徒 F の発言の空欄 ii に当てはまる語句を《現代語訳》中から抜き出して答えよ。

(4) 本文と「孔子家語」の内容を正しくとらえているのは生徒 G ～ I のうち誰か。アルファベットで答えよ。